

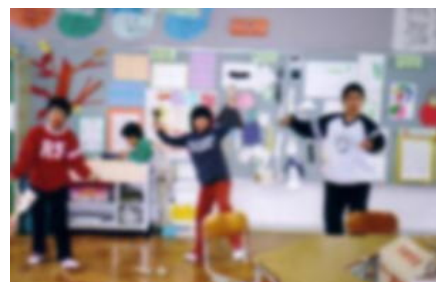
主に指導する教科・領域 生活単元

実 態	目 標	
言葉の意味を理解することができ、指先も器用で、指示に従うことや課題に対して考えを進めることができる。しかし、友達とのかかわりが苦手で、親しくかかわりたい気持ちが強いが、それが相手にとって不快な行為になってしまい、うまく友人関係を築けないことが多い。また、体を動かすことを「疲れる」と言っただけで避ける傾向が強い面もある。ソーラン節を踊る友達を見て、からかうような言葉を掛けていた。	長 期	会の計画に進んで参加することができる。
	短 期	ひな祭り会の決められた計画に沿って練習に取り組むことができる。
	手 だ て ・「踊る→振り返る→踊る」という評価活動を取り入れる。 ・本人の活動への意欲を高め、持続できるようにするために、評価には必ずよい評価も加える。	

< 実践事例 > 単元「ひな祭り会を楽しもう」(児童A)

本単元が始まり、ひな祭り会でソーラン節を踊ることが決まったとき、私の予想よりは、Aの反応は悪くないという印象を受けた。単元の始めは、ひな祭り会当日の流れの説明を行った(オリエンテーション)。「学校からバスに乗って出掛けること」や「たくさんの友達と会を行うこと」にAも少し興奮していた。前年度のひな祭り会でも、自分としては楽しく活躍できたという思いがあるようで、ひな祭り会にはよい印象を抱いていることが理由であろう。

もともと理解力の高い子供であるため、踊りの振り付けを覚えるのも速かった。初めて通して踊ったときに、Aの覚えの速さを「すごいね。たった数回の練習でよく最後まで踊れたね。感心したよ」と褒めた。Aは「そうか」と気のない返事をしたが、うれしそうな様子がうかがえた。



何回か後の練習時、船をこぐ様子の振り付けで、教師が、「船をこぐときは、腰を低くして手首を返しながらやるんだよ」と話すと、Aはぐっと腰を落とし、自分の手首の返しを見ながら踊った。腰を低くして踊ることはとても体力が必要であり、Aにとっては、普段ならば取り組みづらい姿勢と言える。こうしてAは、評価活動の中で具体的に

自分のよかったところを褒められることで、ソーラン節を踊ることの楽しさを感じるようになった。そのため、評価活動の中で「もっと〇〇すると、さらによくなるよ」という助言にも耳を傾け、自分から取り組もうとする様子が表れた。Aの自尊感情が、ソーラン節を踊ることで高まってきたと言えるだろう。

形の出来上がった鳴子に色を塗る場面では、「カラフル鳴子にしよう」と言って、8色のサインペンで熱心に鳴子に色を付けていた。この色付けの場面でも、教師は、「よい色合いになったね」とAに言葉を掛けた。

鳴子を持つての練習場面で、教師は、「鳴子は音が鳴るといいんだよ」と子供たちに言葉を掛けると、Aは、何とか音が出るようにと鳴子を振りながら踊る動きをするようになった。この動きは、振り付けとしては不自然な動きだが、Aが工夫して鳴子が多く鳴る動きを考えたことを評価して、「器用だね。一番しっかり鳴子が

鳴っているね」と言葉を掛けた。Aは、「だってねえ。こうするとねえ。・・・」と鳴子が多く鳴るための自分の工夫について熱心に話した。

Aは、朝登校すると、「今日はソーラン節あるかなあ。何時間目かなあ」とソーラン節の練習を心待ちにするようになった。ソーラン節を励みに他の学習にも熱心に取り組む様子も見られた。

こうしてAは、評価活動で自分の努力や工夫、踊りのよいところを必ず褒められたり、認められたりすることでこの学習課題への意欲が高まり、ひな祭り会への期待感も更に膨らんで、「ソーラン節をやりたい」という感情が「ソーラン節をやるんだ」という意思に変容したととらえている。

ひな祭り会は、バスに乗るときから興奮気味で、いつもより多弁であった。仕度や移動も早く、楽しみにしていることは外から見ていてもよく分かった。

会場では、他校の友達のスタンプも比較的上手に見学していた。

Aたちの出番が来ると、Aは列の中央に立ち、「構えて」の号令を力

強く掛けることができた。ソーラン節の発表では、練習で覚えたことを十分に表現することができた。Aも、学級のみんなも、これまでにないほど力強く踊ることができた。Aは、恥ずかしがったり、あまのじゃくになったりすることが多く、こうした場面では、急にやらないこともあったが、このひな祭り会では、「ぼくはやらない」と言ったり、飽きて寝てしまったりすることがなかった。このことは、Aにとって大きな成長と考えている。



<ひな祭り会での発表の様子>

評 価	今後の課題
自分の努力や工夫、踊りのよいところを必ず褒められたり認められたりすることで、この学習課題への意欲が高まり、ひな祭り会への期待感も高まった。もともとひな祭り会を楽しみにしていた気持ちと結び付いて、「ソーラン節をやりたい」という感情が「ソーラン節をやるんだ」という強い意思に変容したととらえている。	今回の取組では、Aは意欲的に取り組むことができたが、その他の場面では、あまり変容が感じられなかった。生活全般に対して、Aの社会性を高めていくためには、今回のような取組を広げるとともに継続していくことが重要であると考え。評価の方法も、一層本人の意欲が高まるように工夫していきたい。